道徳教科書展示会での視点　（部会長・半沢英一）

はじめに

道徳教科書展示会で各社の教科書に意見を述べようとするとき、何を基準にすればよいか戸惑う向きも多いと思われる。この小文はそういった方の手引きとして書かれた。少しでも参考にしていただければ幸いである。

さて文科省の道徳教育のねらいは、先行する文科省テキスト『私たちの道徳』に現れており、今年度の教科書検定の様子を見ても、『私たちの道徳』路線が踏襲されていることがはっきりと分かる。そこで『私たちの道徳』のねらいと問題点を把握しておく必要がある。

私は拙著（文末参考文献）で『私たちの道徳』全４冊を分析し、『私たちの道徳』を理解する４つのキーワードは「夢」「家族」「きまり」「国」だとし、『私たちの道徳』の意図は

① 「夢」を持ち、競争させられることに疑問を持たない人間を造る。
② 「家族」を絶対視し、疑問を持たない人間を造る。
③ 「きまり」を批判せず、自他の人権と尊厳（そんげん）を考えない人間を造る。
④ 「国」を絶対視し、日本人である前に人間であるなどと考えない人間を造る。

ことにあるとし、これを標語的にまとめれば『私たちの道徳』とは、「理性」なき「夢」、「個人」なき「家族」、「人権」なき「きまり」、「人類」なき「国」だと総括した。以下、上記項目にそって、道徳教科書のどういう点を見ればよいかを具体的に考えていこう。

「理性」なき「夢」

「夢」の同義語として「理想」「情熱」「やりがい」などが考えられる。ブラック企業が労働条件や低賃金を考えず働く都合の良い労働力を得るために喧伝する言葉である。『私たちの道徳』でも企業のみならず、国家や社会に疑問を持たない人間を造ることを目指して乱発されている。二宮尊徳や成功したアスリートのみが顕彰され、挫折や限界のことは小学校テキストでは語られない。中学校テキストで初めて限界が語られるが、驚くべきことに（あるいは見え透いたことに）、自分の挫折の原因は自分にあったと「自己責任」が結論とされていた。したがって留意されるべきは次のようなことである。

（１）「夢」「理想」「情熱」「やりがい」などが強調される程度、異常さはどうか。
（２）一般人の参考にならない成功者のみが取り上げられていないか。挫折や失敗談が排除されていないか。
（３）社会や企業の問題を考えさせないように「自己責任」が強調されていないか。

「個人」なき「家族」

自民党改憲草案で日本国憲法第１３条「すべて国民は個人として尊重される」が「すべて国民は人として尊重される」とされたように、日本の反動支配層は「個人」が嫌いで、『私たちの道徳』でも「個人」を否定するために「家族」が強調されている。戦前の家父長制復帰への妄想や、生活保護を家族に押し付ける意図が「家族」礼賛の背後にある。今回の教科書検定でも「家族の絆を考えよう」が「家族にとって自分のできることは何か」に変えさせられていた。つまり「家族」は絶対的なものであり、その内実を考えることは許さないという姿勢が文科省にある。こうして留意されるべきは次のようなことである。

（４）「家族」がステレオタイプなものしか取り上げられず、ひとり親の家族や障がい者をもつ家族が無視されていないか。
（５）「家族」によって「個人」が抑えられることが美化されていないか。
（６）「家族」の問題を客観的に考える姿勢が排除されていないか。

「人権」なき「きまり」

『私たちの道徳』では様々な「きまり」は護らなければならないものであり、それに疑問を持つことや、変えようとすることは叙述から避けられていた。その一方では、国際人権論や日本国憲法を「きまり」の中には数えず、すべての人間に無条件に与えられているはずの「基本的人権」は、社会的秩序を護る義務をはたした上で与えられるものだという（自民党憲法改正草案同様の）主張が繰り返し行われていた。労働が語られるとき、労働者の権利が語られることがなく、企業が果たすべき社会的責任の中に基本的人権の遵守が挙げられないといった露骨なバイアスがとられていた。したがって留意されるべきは次のような点である。

（７）「きまり」の絶対性が強調される程度、異常さはどうか。
（８）国際人権論、日本国憲法の扱われ方、歪曲の具合はどうか。
（９）基本的人権の扱われ方はどうか。無条件のものとされているか。そうでないとしたら、義務との関係はどう叙述されているか。

「人類」なき「国」

『私たちの道徳』の一大特徴は「日本」を古代から現代まで一貫して変わらず独自に存在し続けたものとイメージさせようとしていることにあった。その結果、牛肉やジャガイモがメインの食材である肉じゃがを「日本人が昔から食べてきた」「和食」とするような珍妙な記述も見られた。今回の検定でパン屋が和菓子屋になおされたという新聞報道は、『私たちの道徳』の偏狭な国家礼賛（逆に「日本」を貶めている）路線が踏襲されていることを示している。また今回の検定では、一教科書の杉原千畝記述で「日本がナチスドイツと同盟を結んでいた」ことを意味する記述が消された。文科省が「特定の価値観を押し付けない」と言

っているのは真っ赤な嘘で、歴史修正主義を犯してまで、日本人である前に人類の一員であるという発想を子どもの段階で奪おうとしていることから目を背けてはならない。以上のようなことから次のようなことに留意してほしい。

（１０）「日本」を「人類」から切り離す姿勢が、どの程度のものか。
（１１）「日本」を美化するために、無理がどれだけなされているか。
（１２）「人類の一員である前に日本人であれ」というメッセージがどの程度、露骨になされているか。

おわりに

安倍政権は教育勅語を園児に暗唱させる幼稚園をバックアップしていたし、現在は同幼稚園との無関係を必死に装ってはいるが、教育勅語の教材使用を閣議決定で認めた。さらに安倍首相の肝いりで成立した育鵬社の、歴史修正主義と基本的人権否定の歴史・公民教科書の採択運動が、石川県を含む日本各地で強力に推し進められている。こういった動きの背後に戦前の国家神道への復帰を目指す日本会議の策動があることが現在では広く知られるに至った。道徳教科化は日本会議の国民思想統制戦略の一環であることから目をそらしてはいけない。

ところで高級官僚の権力に対する「忖度（そんたく）」が問題になっているが、今回の道徳教科書検定から分かる各社教科書の内容にも文科省に対する「忖度」がうかがわれる。つまり『私たちの道徳』の問題点を意識せず、その傾向を自主的に取り入れようとする姿勢がうかがわれる。だから育鵬社が参加しなかったとはいえ、参加した道徳教科書の間に決定的な差異はなく、すべての教科書に問題があると考えなければならない。しかし、その場合でも、少しでもまともな教科書を選ぶ努力を行わなければならない。この小文が、その場合の参考になることを望むのみである。

ただし、「少しでもまともな教科書」を選ぶだけでは、子どもたちを「臣民道徳教育」から護ることはできない。そのためには、道徳教育を担当する教職員のみならず、一般の市民が、主権者として日本社会のあり様に責任を持ち、かつ日本人である前に（少なくとも、あると同時に）人類の一員として人類の未来に対して責任を持つ「市民道徳」を持たなければならない。その「市民道徳」の立脚点は、国際人権論、日本国憲法、反歴史修正主義、知性主義である。この「市民道徳」に立脚するとき、文科省さえ「特定の考えを押し付けたりしない」と建前上言わざるをえない社会状況下では、文科省の「臣民道徳教育」など恐れるにたりないのである。

参考文献　半沢英一『こんな道徳教育では国際社会から孤立するだけ』合同出版２０１７